

岡崎敬語調査での機能的要素の経年変化について： 「荷物預け」場面の対人配慮を中心に

著者	丁 美貞
雑誌名	国立国語研究所論集
号	10
ページ	41-54
発行年	2016-01
URL	http://doi.org/10.15084/00000828

岡崎敬語調査での機能的要素の経年変化について

——「荷物預け」場面の対人配慮を中心に——

丁 美貞

国立国語研究所 時空間変異研究系 非常勤研究員

要旨

本稿では、国立国語研究所の経年調査研究である岡崎敬語調査データの「荷物預け」場面を用いて、第1次調査から第3次調査までの反応文を機能的要素について分析した結果について述べる。

分析のために、熊谷・篠崎（2006）に基づき次のように、「荷物預け」場面の反応文をコミュニケーション機能とその下位分類の機能的要素に分類した。《さりだし》《状況説明》《効果的補強》《行動の促し》《対人配慮》《その他》の六つのコミュニケーション機能と、その下位分類として「注目喚起」「用件」「事情」「不都合」「請け合い」「預かりの依頼」「依頼の念押し」「意向の確認」「恐縮の表明」「その他」の10項目の機能的要素である。本稿ではコミュニケーション機能と機能的要素の使用例とその使用頻度及び、経年変化について高年・壮年・若年に分けて分析した。その結果、高年は壮年と若年に比べて多様な機能的要素を使用していることが明らかになった。さらに本研究で注目している対人配慮の経年変化については、《対人配慮》を表す「恐縮の表明」と《さりだし》を表す「注目喚起」の二つの機能的要素である「すみません」が、第3次調査では決まり文句のように典型的な表現に変化したこと、及び「恐縮の表明」を表す「申し訳」系の表現の増加について述べた。

キーワード：機能的要素、コミュニケーション機能、対人配慮、恐縮の表明、世代差

1. はじめに

国立国語研究所では1950年代から半世紀以上にわたって、愛知県岡崎市において大規模な敬語調査を3回実施している。1953年に行われた第1次調査では、丁寧に内在する「基準」を探り、敬語使用とその意識に関わる法則とメカニズムを明らかにすることを目的とした。第1次調査から約20年経過した1972年に、敬語使用の意識と法則とメカニズムがどのように変化したのかを探るため第2次調査が行われた。さらに2008年、第1次調査から半世紀にわたる時が流れ、敬語の変化をみつめる目的で第3次調査が実施された。本稿では、岡崎敬語調査から得られたデータ（反応文）を利用してコミュニケーション機能とその下位分類である機能的要素の経年変化について分析し、その結果について述べる。さらに、対人配慮の経年変化についても考察する。

2. 岡崎敬語調査の調査デザインと場面

2.1 調査デザイン

岡崎敬語調査は、二つの調査を組み合わせで行われた。過去3回の調査では、ランダムサンプリング調査を実施すると同時に、第2次調査以降は、過去の調査に参加した被調査者の協力を得てパネル調査も並行して実施した。ランダムサンプリング調査は、地域の言語変化の実態を明確にすることを目的とし、パネル調査は、実時間の経過の中で、同一個人の敬語行動・意識がどの

ように変化したかを明らかにすることを目的としている。今回の分析ではランダムサンプリング調査のデータのみを利用した。

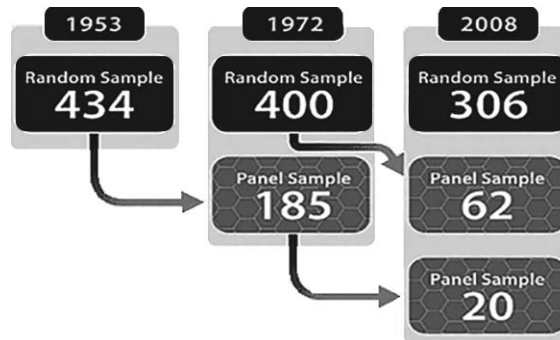


図1 岡崎敬語調査サンプル関係図

2.2 場面

各調査は、敬語使用に関わるいくつかの場面をもとに行われた。具体的には、調査員が各場面で場面を示す挿し絵を見せ、口頭で場面の説明をした上で回答を得た。3回の調査で共通する場面は11場面である。各場面の質問文と挿し絵から得た回答文を反応文と呼ぶ。本稿では、「荷物預け」場面を取り上げる。4節で詳述する。

3. コミュニケーション機能と機能的要素

3.1 コミュニケーション機能と機能的要素の定義

談話の構造を分析するには様々な方法があるが、本稿ではコミュニケーション機能と機能的要素に基づいて分析することにする。

熊谷・篠崎（2006）¹では、「機能的要素」については、「呼びかけ・説明など、発話を相手に対する働きかけの機能を担う最小単位²に分割したものである。」と定義している。また、「コミュニケーション機能」を「機能的要素」の上位分類と位置づけ、言語行動において個々の機能的要素がどのような役割を担っているかという観点からグループ化したものである。」と定義している。

3.2 岡崎敬語調査の「荷物預け」場面でのコミュニケーション機能と機能的要素

「荷物預け」場面は依頼場面であるため、熊谷・篠崎（2006: 22-23）では、対人行動を構成し得

¹ 熊谷・篠崎（2006）は〔仙台〕〔東京〕〔京都〕〔熊本〕の四つの大都市で行った調査をまとめた研究である。調査票の質問文は「荷物預け」場面、「往診」場面、「釣銭確認」場面で岡崎調査と同じ質問文である。

² ここで述べている単位というものは「moveという単位に依拠している」と中田（1990）は述べている。中田（1990: 113）はmove（本稿では「ムーブ」と表す）について、津田（1989）が「会話の中で話し手が発するスピーチの最小の機能的な単位」と定義しているとした上で、元来「チェスなどの駒の動きを意味する語」が「会話の分析に応用されて、相手に対してどのようなはたらきかけをするか、こういった「手」を指すかという、質問、陳述、要求などの機能を担う最小の単位として用いられるようになった」と述べている。

る要素として次の六つのコミュニケーション機能をあげ、個々のコミュニケーション機能の中であげられる機能的要素について表1のようにまとめている（熊谷・篠崎（2006: 23）の表3-3より、「荷物預け」場面に関する部分を引用、一部改変）。

- (1) 話を始める《きりだし》
- (2) 相手に事情を知らせ、依頼の必要性などの状況認識を共有してもらう《状況説明》
- (3) 相手の承諾を引き出すような働きかけをする《効果的補強》
- (4) 依頼の意を表明する《行動の促し》
- (5) 相手の負担に対する恐縮や遠慮の気持ちを表明する《対人配慮》
- (6) それ以外は《その他》

表1 「荷物預け」場面におけるコミュニケーション機能と機能的要素の対応一覧
（熊谷・篠崎 2006: 23 表3-3 より）

コミュニケーション機能	機能的要素	例
きりだし	A. 注目喚起 B. 用件	すみません／○○さん たのんでいいですか？
状況説明	C. 事情 D. 不都合	よそえまわりますから おもたい／かさばるから
効果的補強	E. 請け合い	あとでとりにきます
行動の促し	F. 預かりの依頼 G. 依頼の念押し H. 意向の確認	預かってください お願いします どーですか
対人配慮	I. 恐縮の表明	すみませんが／ おじゃまでしょうが
その他	J. その他	ここえおいとくから

4. 研究概要

4.1 「荷物預け」場面

「荷物預け」場面とは、図2の挿し絵を見せて質問をする場面であり、挿し絵の中の店員は20-30代の男性とされている（柳村 2014）。また、質問文は以下の通りである。



質問文

これはあなたの買いつけの店です。この店で買物をしましたが、ちょっとよそへ廻るので、この荷物をあずかっておいてもらう場合、店のこの人に、何と言って頼みますか。

図2 「荷物預け」場面の挿し絵と質問文

4.2 データ

本稿で用いた「荷物預け」場面のデータは以下の通りである。

- (1) 「荷物預け」場面の第1次～第3次調査でのランダムサンプルの反応文を利用する。
- (2) 反応文の中では2回目3回目の答えもあるが、第1回目の答えの反応文のみ³使用する。
- (3) 答えが得られなかったNRを除く。
- (4) (1) から (3) の条件を満たす反応文、945文を用いて分析のデータとする。

4.3 分析方法

本稿では、以下の三つの観点から分析を行う。まず、量的面で三つの世代（若年・壮年・高年）での機能的要素の使用実態を確認する。次に、調査次ごとの分析を行うことによって、経年の変化についても確認する。さらに、《対人配慮》の経年変化についても分析を行い、その結果を考察する。

4.4 「荷物預け」場面の反応文の分割例

表2に、「荷物預け」場面の反応文をムーブに分割し、そこに現れる機能的要素とその上位のコミュニケーション機能を付与した例をあげる（「ムーブ」については脚注2参照）。なお、表2をはじめ、本稿で示した反応文については、文中の空白の有無を含め、使用したデータをそのまま引用した。

分割した基準は、熊谷・篠崎（2006）に基づいており、筆者が分割した反応文をもう一人が確認することによってまとめた。「荷物預け」場面で出現したムーブ数は1回から6回までで、反応文の長さによっては一つの反応文の中に、同じ機能的要素とコミュニケーション機能が出現することも多数あった。今回は分割方法の中で一つの反応文の中に同じ機能的要素が複数出現したものを延べ要素数⁴として数え、使用頻度数として用いることにする。

³ 熊谷・篠崎（2006: 21）は「働きかけ方を見るという本章の趣旨からして、そうした誘導に影響されていない回答を分析することが望ましいと考え、複数の回答がある場合は最初に述べられた回答のみを分析対象とした」と述べており、本分析でもそれにしたがった。

⁴ 同じ機能的要素が2回出現したら使用回数は2回と数えた。

表2 反応文をムーブに分割した例

ムーブ数	反応文	機能的要素	コミュニケーション機能
1	ちょっと あずかって ください	預かりの依頼	行動の促し
2	すこし かいものが あるので	事情	状況説明
	えー 荷物を 預かってもらえますか	預かりの依頼	行動の促し
3	おばさん	注目喚起	きりだし
	ここえ おかしといて ちょーだい	預かりの依頼	行動の促し
	ちょっと いって きます	事情	状況説明
4	すいません、	注目喚起	きりだし
	申し訳ないんですけど	恐縮の表明	対人配慮
	ちょっと かいものに いってきたいので	事情	状況説明
	この荷物 ちょっと 預かっていただけないでしょうか	預かりの依頼	行動の促し
5	すいませんけど	恐縮の表明	対人配慮
	この つつみ ちょっと お預かり して いただけないでしょうか	預かりの依頼	行動の促し
	ちょっとよそへまわってきますから	事情	状況説明
	すぐきますから	請け合い	効果の補強
	おねがい いたします	依頼の念押し	行動の促し
6	これ じゅうようなものも はいっておるで	事情	状況説明
	しばらくのあいだ にさんじかん	事情	状況説明
	すまんけども	恐縮の表明	対人配慮
	ひとつ 預かっていただきたい	預かりの依頼	行動の促し
	なにぶんとも よろしく たのむ	依頼の念押し	行動の促し
	誠に すまんけども	恐縮の表明	対人配慮

5. 分析結果

分析結果については、世代別の使用と調査次ごとの経年変化を明らかにする。特にコミュニケーション機能の経年変化のうち、対人配慮にフォーカスを当てて分析することとした。

5.1 世代別の使用

まず、世代別の使用については、3世代（若年14～29歳・壮年30～49歳・高年50～79歳）でのコミュニケーション機能と機能的要素の使用を確認する。

世代別のコミュニケーション機能と機能的要素の使用実態を確認するために、世代別と調査次別に反応文数をまとめた（表3参照）。分析は、世代別、調査次別に反応文数が異なるため、割合で行うことにする。

表3 世代別・調査次別の反応文数

	1次	2次	3次	計
高年	49	88	139	276
壮年	85	156	109	350
若年	110	155	54	319
計	244	399	302	945

5.1.1 コミュニケーション機能

まず、世代別のコミュニケーション機能の使用数をみると、表4のように3世代が同様に行動の促し>状況説明>対人配慮>きりだし>効果的補強>その他の順で使用していることがわかった。先行研究である熊谷・篠崎（2006）での行動の促し>状況説明>きりだし>対人配慮>効果的補強>その他の順とは一部異なった結果となった。

表4 世代別のコミュニケーション機能の使用数と使用割合

	きりだし	状況説明	効果的補強	行動の促し	対人配慮	その他	反応文数
高年	38 (14%)	213 (77%)	31 (11%)	291 (105%)	111 (40%)	6 (2%)	276
壮年	46 (13%)	250 (71%)	13 (4%)	356 (102%)	158 (45%)	2 (1%)	350
若年	40 (13%)	245 (77%)	16 (5%)	317 (99%)	158 (50%)	1 (0%)	319
計	124	708	60	964	427	9	945

依頼場面である「荷物預け」場面では、相手に依頼を表明する《行動の促し》が99～105%使用され、そのための《状況説明》が多く、ついで相手の負担に対する恐縮や遠慮の気持ちを表す《対人配慮》を使用していることが確認できた。また、若年の方が壮年と高年に比べて《対人配慮》をより多く使用していることが明らかになった。コミュニケーション機能の使用回数は延べ機能数として数えた。一つの反応文の中に同じコミュニケーション機能が複数出現することがあるため、表4で使用割合が100%を超えることがある。

5.1.2 機能的要素

次は、コミュニケーション機能の下位分類である機能的要素の分析結果である（表5参照）。機能的要素の全体では、預かりの依頼>事情>恐縮の表明>注目喚起>請け合い>不都合>依頼の念押し>意向の確認>その他>用件の順で使用していることがわかった。

表5 世代別の機能的要素の使用数

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
高年	37	1	201	12	31	276	11	4	111	6
壮年	46	0	245	5	13	347	4	5	158	2
若年	40	0	242	3	16	312	3	2	158	1
計	123	1	688	20	60	935	18	11	427	9

A. 注目喚起 B. 用件 C. 事情 D. 不都合 E. 請け合い F. 預かりの依頼 G. 依頼の念押し H. 意向の確認 I. 恐縮の表明 J. その他

5.1.3 使用回数

続いて、荷物を預ける時の機能的要素の使用回数について述べる。

一つの反応文において機能的要素を2回もしくは3回使用して依頼をしていることが多い（図3参照）。しかも、一つの反応文において同じ機能的要素を複数回使用していることも少なくない。そこで、使用回数は延べ要素数として数えた。

3世代ともに機能的要素を2, 3回使用して依頼をしていることが多かった。2回と3回の使用数を合わせると、3世代ともに79～80%になった。ただし、高年は図3の通り若年と壮年より機能的要素を多く使用する傾向があり、3回使用した場合が37%と他の世代より割合が多く、さらに、若年と壮年にはない機能的要素を6回も使用した高年もいた。4回以上の使用数では、高年が計11%と一番多い。この結果から、若年・壮年よりは高年の世代が多様な機能的要素を使用していると言えるだろう。今回分析した使用回数の中で、高年が多様な機能的要素を使用し依頼表現を行っていることについては先行研究である熊谷・篠崎（2006）も論じている。

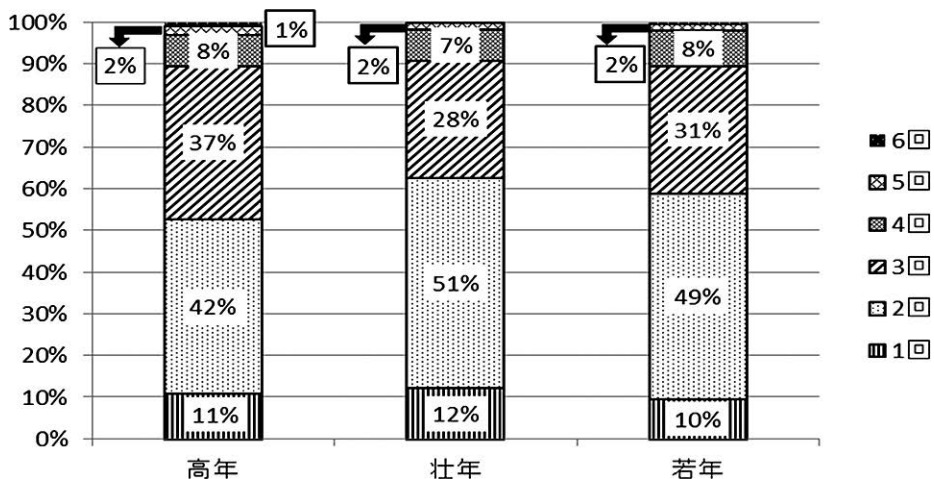


図3 世代別の機能的要素の使用回数

5.2 調査次ごとの変化

5.2.1 コミュニケーション機能の変化

調査次ごとに、コミュニケーション機能の観点から、反応文を分析すると、ここでも変化が起きていたことがわかった。まず、図4（次頁）は六つのコミュニケーション機能の調査次ごとのグラフである。グラフの読み方は、縦軸が1反応文当たりのコミュニケーション機能の使用数の平均で、横軸が調査年を表す。三つの点は左から第1次、第2次、第3次の調査次を表す。

調査次ごとのコミュニケーション機能の使用実態から、《きりだし》と《状況説明》、《効果的補強》、《対人配慮》が第1次から第3次にかけて変化していることがわかる。《きりだし》と《効果的補強》の場合は増加、《状況説明》と《対人配慮》は減少している（図4参照）。《対人配慮》については改めて5.3で述べる。

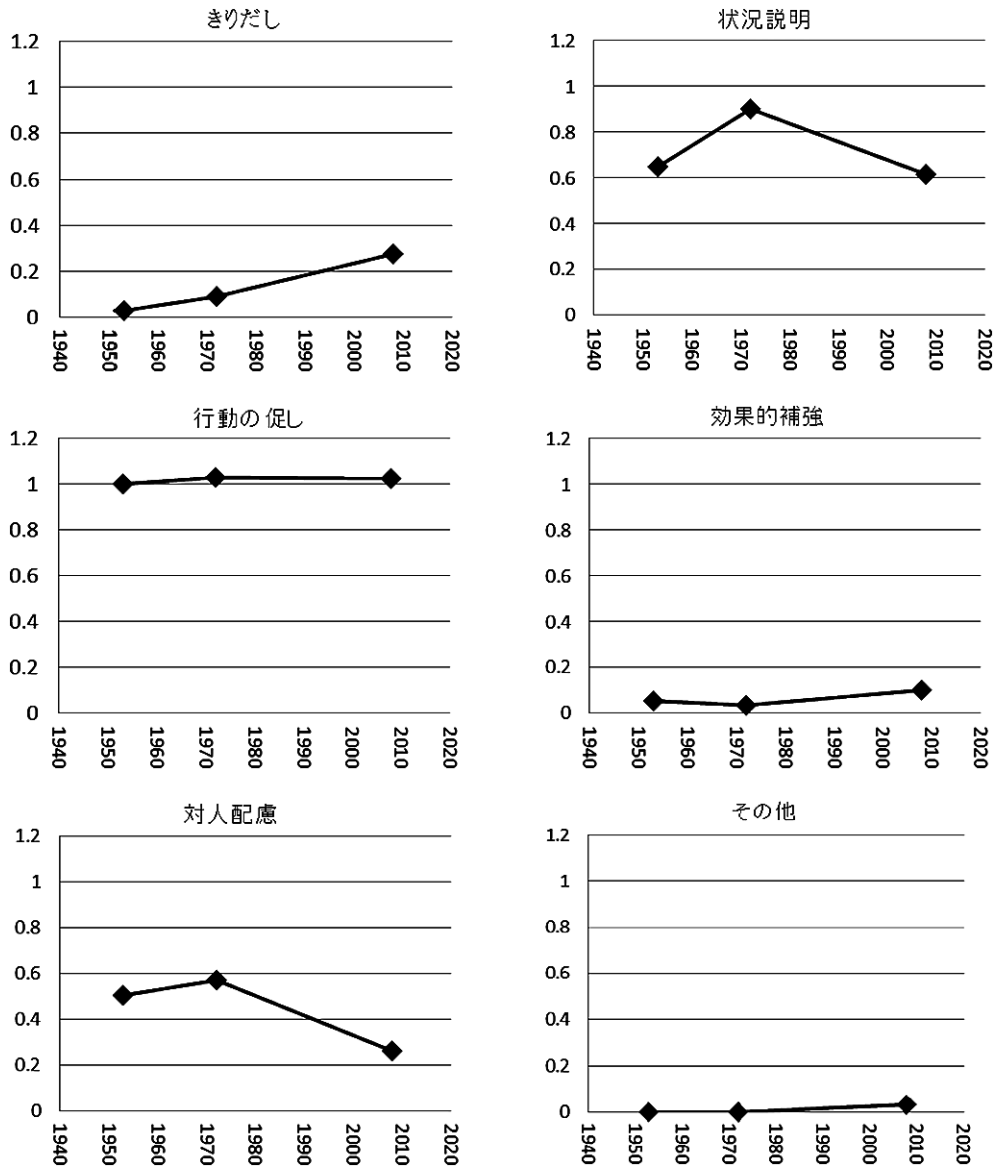


図4 調査次ごとの各コミュニケーション機能

5.2.2 機能的要素の変化

図5 以下で機能的要素の変化をコミュニケーション機能別に比較する。まず, 《きりだし》の中の機能的要素の「注目喚起」と「用件」を比較すると, 「用件」は第1次から第3次までほとんど使われない一方で, 「注目喚起」は右上がりの増加を示している。

次に《状況説明》の中に「事情」と「不都合」という機能的要素があるが, 「事情」のほうは第2次に増加したが何らかの理由で第3次に減少した(図6 参照)。《効果的補強》の「請け合い」

はあまり変化がない(図7参照)。また、《行動の促し》の中では「預かりの依頼」「依頼の念押し」「意向の確認」の全てに変化が見当たらず(図8参照)、《対人配慮》の「恐縮の表明」で減少がみられた(図9参照)。

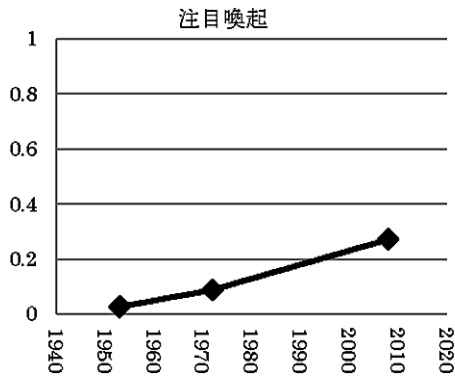


図5 (1) 調査次ごとの《きりだし》

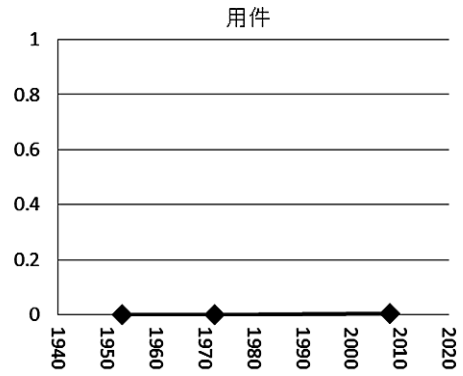


図5 (2) 調査次ごとの《きりだし》

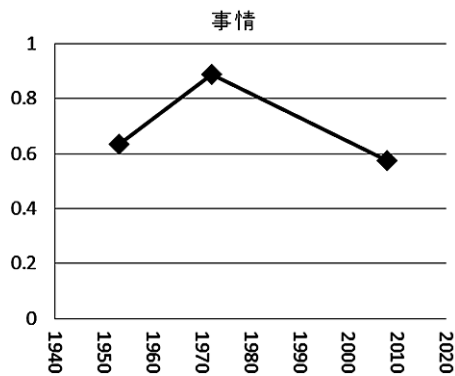


図6 (1) 調査次ごとの《状況説明》

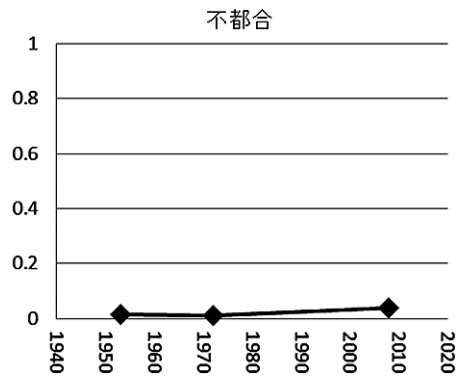


図6 (2) 調査次ごとの《状況説明》

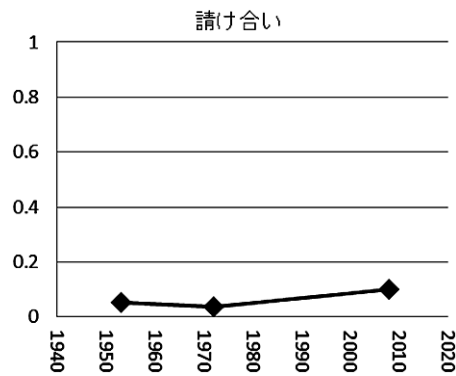


図7 調査次ごとの《効果的補強》

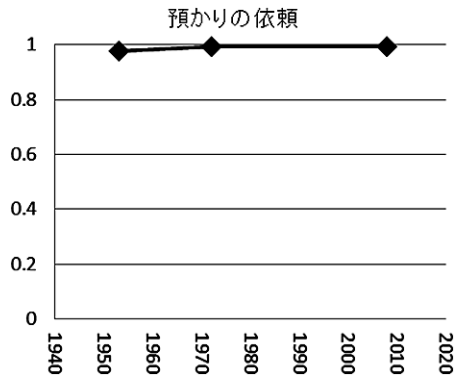


図8 (1) 調査次ごとの《行動の促し》

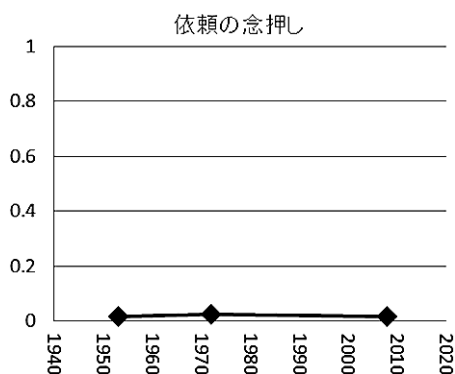


図 8 (2) 調査次ごとの《行動の促し》

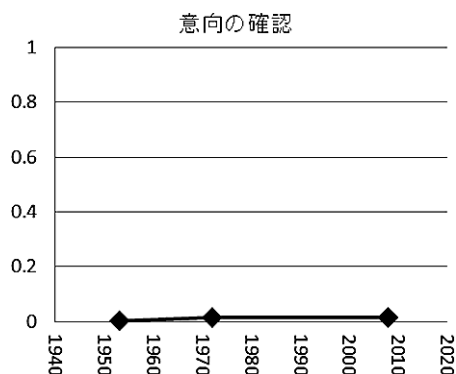


図 8 (3) 調査次ごとの《行動の促し》

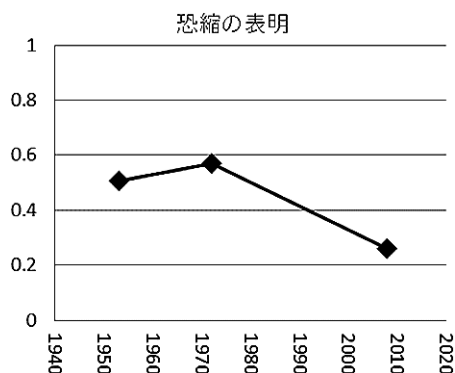


図 9 調査次ごとの《対人配慮》

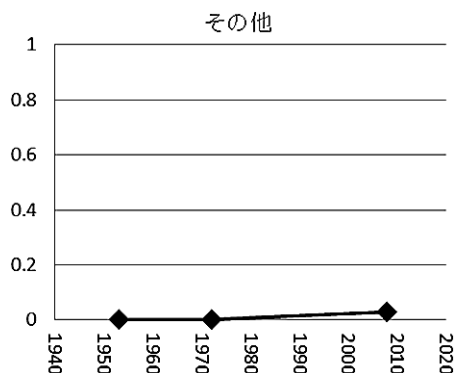


図 10 調査次ごとの《その他》

5.3 「荷物預け」場面の対人配慮

熊谷・篠崎（2006）ではコミュニケーション機能の中で、「相手の負担に対する恐縮や遠慮の気持ちを表明する」ことを《対人配慮》に分類する際の手がかりとしている。そこで、本分析では冒頭に出現する「すみません」は「注目喚起」（《きりだし》）に、反応文の冒頭と文中に出現する「すみません（が、けど）、すまん」は「恐縮の表明」（《対人配慮》）として分類した（表 6 参照）。

「注目喚起」は、第 1 次調査から第 3 次調査まで増加している（図 5 の「注目喚起」参照）。しかし「恐縮の表明」は、第 2 次調査から第 3 次調査まで減少している（図 9 の「恐縮の表明」参照）。

そこで、筆者はこの二つの機能的要素の変化について以下の二つの仮説を立てた。

1. 「注目喚起」の表現の中で、「すみません」という表現の増加及びパターン化が起きる。
2. 「すみません」の意味を考えると、呼びかけの「注目喚起」で使用しているので、「恐縮の表明」としては使わなくなる。

表 6 「注目喚起」と「恐縮の表明」に分類された例

	語彙の例	反応文の例
注目喚起	すみません・おじさん・おばさん・○○さん	(1) すいません ちょっとほかのほうをみてるので そのあいだ預かってもらえますか (2) すいません すこし置かせてください
恐縮の表明	すみ（い）ませんが・すみませんけど・すまん・おそれいります・わるい・申し訳（ない／ございませんなど）・おきのどく・ご迷惑・ごめん・失礼など	(1) 申し訳ないんですけど しばらく 荷物を 預かっていて も らえませんか (2) すみませんが よその みせに まわりますから あずけといて ください (3) おじゃまでしょうが ちょっと おねがい します

まず一つ目の「注目喚起」としての「すみません」の表現の増加については、図 11 からわかるように、第 1 次調査では高年と壮年の使用はみられなかった（図 11 の縦軸は、1 反応文当たりの「すみません」の使用数の平均を表す）。なお、第 1 次調査の高年の反応文には、以下のように反応文の冒頭で「恐縮の表明」表現として「すみ（い）ません（が）」が使用されている例がみられる。

- 例 (1) すみませんが よその みせに まわりますから あずけといて ください
(2) すいませんが しばらく これを お預かり ねがいます

冒頭に「すみません」を使用している表現が、第 3 次調査では 3 世代全てが使用するようになり、また、高年の使用が急激に増加していることから、この半世紀で、相手に依頼をする時及び呼びかける際、冒頭に「すみません」の表現を使用することが典型的な使い方になっており、いわば定形文のようになってきていることがわかる。この、相手に依頼をする時及び呼びかける時に使用する「すみません」という表現は、現在の日本語の使用の中ではパターン化してきたと考えられるのである。

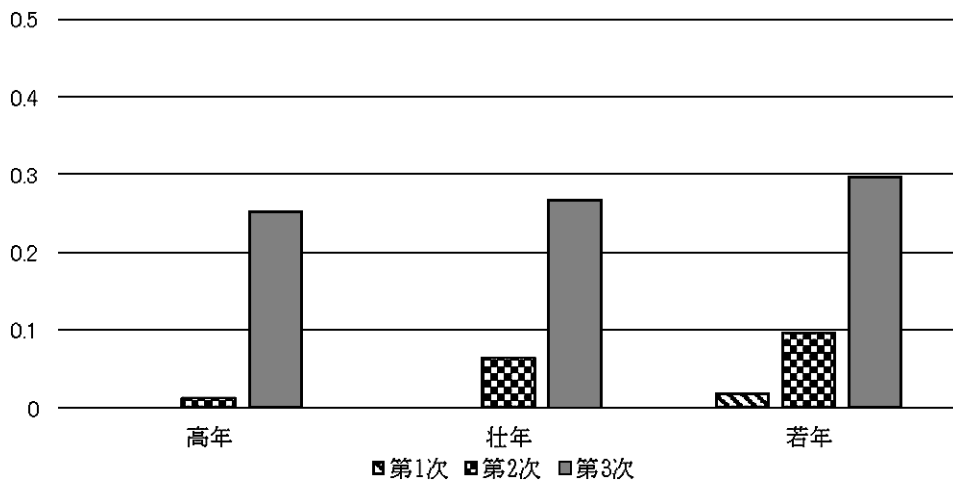


図 11 3 世代の「注目喚起」としての「すみません」の使用

次に、二つ目の仮説「恐縮の表明」の減少においては、反応文の冒頭に「すみません」の表現を使用することによって、複数回の恐縮の表現をする必要が薄くなってきたと考えられる。しかし、ここで「恐縮の表明」を表現する中で、増加している「申し訳」系⁵の表現に注目したい。「恐縮の表明」のうち、「申し訳」系の反応文の例は以下の通りである。

例 (3) 申し訳ありませんが かいものを してくるあいだ お預かりねがえますか

(4) 申し訳ございませんが えー 荷物を いちじ 預かっていただくことは できません
 んでしょうか

次に図 12「申し訳」系のグラフをみると、第 1 次調査では 3 世代の全てで使用がみられない表現である（図 12 の縦軸は、1 反応文当たりの「申し訳」系の使用数の平均を表す）。第 2 次調査から少し使用がみられるようになり、第 3 次調査では 3 世代全てが使用するようになっている。この「申し訳」系の表現が増加した理由については、いくつか考えられるが、まず、買いつけの店であってもあまり親しくない、またある程度の距離を置く関係であるため、「申し訳ございません」というあらたまった表現を使用することが考えられる。買いつけの店の店員との対人関係が親しい関係からあまり親しくない関係に変わったことが荷物預け場面に現れたと思われるが、これは極めて一部の例である。しかし、個人個人の対人関係が社会全体にも影響を与え得ることを考えると、社会的親疎関係の変化に伴って、恐縮を表す表現も変化した可能性がある。

さらに、共通語化という言語的理由によって、さらに丁寧度の高い言い方が（第 3 次調査では社会的活躍層としての壮年層に多く）普及したとも考えられる。

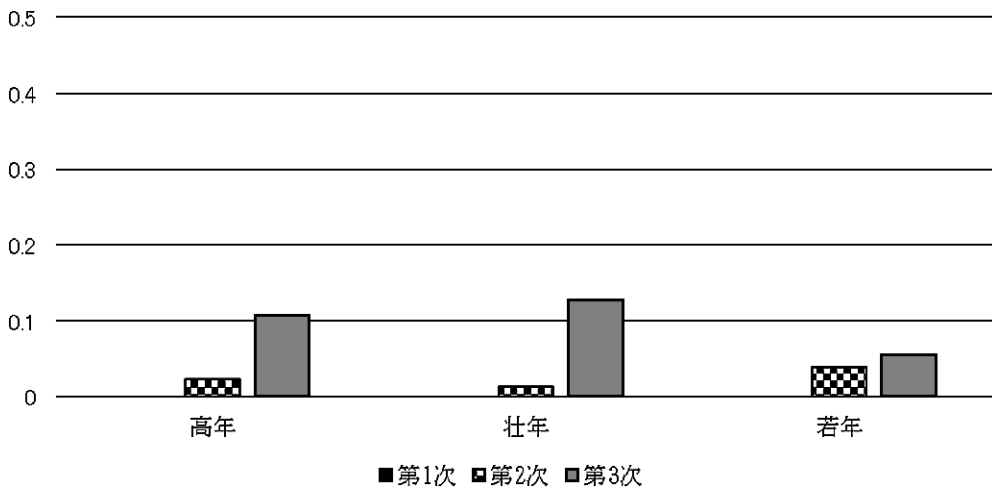


図 12 3 世代の「申し訳」系の使用

⁵「申し訳（ない／ございません／ありません）」など「申し訳」という表現を使用した場合を指す。

6. 結論と今後の課題

本稿では、国立国語研究所の岡崎敬語調査の「荷物預け」場面におけるコミュニケーション機能及び機能的要素について、その使用と経年変化、併せて、対人配慮の経年変化を中心に述べた。

まず、コミュニケーション機能に分類されている《きりだし》《状況説明》《効果的補強》《行動の促し》《対人配慮》《その他》の六つの機能の使用については、行動の促し＞状況説明＞対人配慮＞きりだし＞効果的補強＞その他の順で使用されていることがわかった。また、コミュニケーション機能の下位分類である機能的要素の使用について、預かりの依頼＞事情＞恐縮の表明＞注目喚起＞請け合い＞不都合＞依頼の念押し＞意向の確認＞その他＞用件の順で使用されていることがわかった。

また、使用頻度という観点からみると、機能的要素は1反応文当たり1回から6回まで現れるが、多くは2, 3回の使用であることがわかった。ただし、高年は、若年・壮年に比べて多様な機能的要素を使用していることがわかった。

調査ごとにみると、第1次調査から第3次調査まで変化がない項目もあったが、ここでは《対人配慮》を表す「恐縮の表明」と《きりだし》を表す「注目喚起」の二つの機能的要素である「すみません」と「申し訳」系の表現の変化に注目した。特に第1次調査では、「すみません」の表現が「注目喚起」として若年のみに使用されていた。しかし、第3次調査では、3世代全てで決まり文句のように典型的な表現として使用されるようになっており、パターン化が進んできたと考えられる。

日本語の「すみません」という表現については、ジャン＝ルネ・ショレー (1983: 11) は「日本人は他人に対する義理意識の念がことのほか強く、そしてそういった念が日本語にも反映されてしまうことに気づいた。『すみません』と言うことによって、自分が受けた親切をまだ十分に返済していないことを認識するのである。」と述べている。また、小川 (1993) は「すみません」の機能について「単に感謝を表すだけでなく (中略) ディスコース・ユニットの基本的な構成要素として、話の場づくり、話題づくりの機能を持っている。さらに、会話の途中で会話を円滑に進める機能を持っている」と述べている。岡崎敬語調査での機能的要素の反応文でも話の場づくり、話題づくりのような役割を果たしていることがわかった。また、小川 (1993) も指摘しているように、高年代は20代から30代の男性の店員に対して「すみません」を使う傾向がある。

また「申し訳」系の表現は出現した数こそ少なかったものの、第1次調査には全く現れなかった表現である。謝罪表現は「ごめんなさい」「すみません」「申し訳ございません」などがあげられる。小川 (1993) も「『すみません』は若い世代で目上に対する軽いわびに多用されるが、わびの程度が重くなるにつれて「すみません」よりも「申し訳ありません」が使われる。」と指摘しているように、《対人配慮》のうち「申し訳」系の使用が、第1次調査では1回も出現しなかったにもかかわらず、第2次調査から第3次調査にかけて増加していることから、親疎関係の変化がうかがえる。買いつけの店に荷物を預ける状況に、以前は詫びの程度が軽く認識されていたのが重く認識されるようになったとすれば、現代日本では買いつけの店との親疎関係が「親」から「疎」に変化したものと考えられる。

本稿では「荷物預け」場面における、コミュニケーション機能と機能的要素について述べた。今後の課題として、コミュニケーション機能と機能的要素の情報付与を全場面の全反応文（ランダムサンプリング調査とパネル調査）に対して行う必要がある。しかし、その前に、場面によって異なるコミュニケーション機能と機能的要素の命名が必要であり、その後に分割作業を経て岡崎敬語調査全体のコミュニケーション機能と機能的要素の分析を行うことになる。

参考文献

- ジャン＝ルネ・ショレー（1983）「すみません」ドナルド・キーンほか（著）、松本道弘（訳）『モシモシ・すみません・どうも』8-11. 東京：講談社インターナショナル.
- 熊谷智子・篠崎晃一（2006）「依頼場面での働きかけ方における世代差・地域差」国立国語研究所『言語行動における「配慮」の諸相』19-54. 東京：くろしお出版.
- 中田智子（1990）「発話の特徴記述について―単位としての move と分析の観点―」『日本語学』9(11): 112-118. 明治書院.
- 小川治子（1993）「『すみません』の社会言語学的考察」『言語文化と日本語教育』6: 36-46.
- 津田葵（1989）「社会言語学」柴谷方良・大津由紀雄・津田葵『英語学大系第6巻 英語学の関連分野』363-497. 東京：大修館書店.
- 柳村裕（2014）「ことばの丁寧さの経年変化と社会的要因―岡崎敬語調査から―」『国立国語研究所論集』8: 177-196.

Long-term Changes of Functional Elements in the Okazaki Survey of Honorifics: Focusing on Interpersonal Consideration in a “Luggage Leaving” Scene

JEONG Mijeong

Adjunct Researcher, Department of Language Change and Variation, NINJAL

Abstract

This paper describes the results of analyzing the functional elements of data from the “luggage leaving” scene in the Okazaki survey of honorifics, one of the long-term studies by the National Institute for Japanese Language and Linguistics (NINJAL).

The analysis is informed by the research of Kumagai and Shinozaki (2006), who classify the reaction statements in the “luggage leaving” scene into communication functions and functional elements. In the scene, there are six communication functions, i.e., “starting a conversation,” “briefing,” “effective reinforcement,” “interpersonal consideration,” “prompting action,” and “others.” In addition, there are 10 functional elements of subdivision, i.e., “calling for attention,” “business,” “circumstances,” “inconvenience,” “assurance,” “request for leaving luggage,” “reminding of the request,” “confirmation of the intention,” “expressing gratitude,” and “others.” This paper presents usage examples of the communication functions and the functional elements, their frequency of use, and long-term changes. Furthermore, it examines the long-term changes of interpersonal consideration on which it is focused.

Key words: functional elements, communication functions, interpersonal consideration, expressing gratitude, generation gap